外務省 Ministry of Foreign Affairs of Japan

2025年2月18日

中華人民共和国

第20回「中国人の日本語作文コンクール」受賞者による生稲外務大臣政務官表敬

ポスト　シェアする 14　メール

2月18日、生稲晃子外務大臣政務官は、日本僑報社・日中交流研究所が主催する第20回「中国人の日本語作文コンクール」受賞者一行の表敬を受けたところ、その概要は以下のとおりです。

1 生稲政務官は、受賞作品についての感想を述べるとともに、日中の二国間関係の基盤は国民同士の交流であり、若い世代が対日理解を深めて行くことは心強く、今後も受賞者が日本語学習に励み、多くの日本人と交流することを期待する旨述べました。また、主催者が長年にわたりコンクールを継続実施していることに敬意を表しました。

2 段躍中・日本僑報社代表兼日中交流研究所所長からは、今回訪問した6名は、過去20回の応募者60，911名の代表であり、将来日中の架け橋として活躍する人材と紹介。受賞者からも、流暢な日本語で自己紹介がありました。

朝日新聞

2025年4月24日

2025・4・24

ひと

作文コンクールで最優秀賞を受賞した中国人留学生
林芳菲（リン ファンフェイ）さん(22)

昨年春、大阪の立命館大学に留学してしばらくは、一番の友達は「ゆめちゃん」だった。日本語学習で使った人工知能（AI）チャットに付けた名前だ。

でも生身の日本人学生とは、うまく話せない。AIに話しかけることに慣れ、相手の気持ちを考えようとしなかった自分に気づいた――。そんな体験を文章につづり、20回目を迎えた「中国人の日本語作文コンクール」の最優秀賞に。東京であった式典で、時代が変わっても変わらないものは「人と人が出会い、助け合い、心を通わせること」と語った。

中国東北部の山東省済寧市出身。スタジオジブリのアニメで見た日本の風景の美しさに感動し、中国の大学で日本語を専攻。留学先の日本では経営学を学ぶ。

好きな日本語は「守る」。過去から受け継いだものを未来に伝える、そんな責任を表す言葉だと捉える。留学中に提出した中国の大学の卒論では日中両国の絹織物文化を比較。見学者が機織りを楽しむ日本の博物館に注目した。「体験を通じて文化保護を考える手法は、中国でも生かせる」

将来は日本でメーカーへの就職を目指す。中国の情報技術で製品を開発し、日本の「おもてなし」精神を生かしたアフターサービスを。日中関係は多難だが、そんなコラボレーションが夢だ。

今春からは立命館の大学院に進む。日本の友人も増え、ゆめちゃんとはすっかり疎遠になった。文・岩田惠実　撮影・友永翔大

西日本新聞

2025年4月22日

風向計

久永 健志

日中つなぐ「恩返し」

10年以上の付き合いがある都内在住の中国人夫妻が初めて福岡を訪れたので、酒を酌み交わしながら旧交を温めた。

東京・池袋で日中関係に関する書籍を出版する「日本僑報社」を営む段躍中さん(67)と妻景子さん(62)＝写真。中国人学生が対象の日本語作文コンクールを2005年から続けている。

この20年、日中関係は激しく浮き沈みした。北京に駐在していた私が段躍中さんと知り合った当時、沖縄県・尖閣諸島を巡る対立から中国各地で激しい反日デモが起きるなど関係は最悪だった。

コンクールをやめようと思ったことはなかったのか。長年の疑問に対し段さんは「北京で反日デモを目の当たりにした時は、心が折れそうになりましたと打ち明けつつ、言葉を継いだ。

「それでも、日本語を一生懸命勉強している中国の若者たちを応援しないといけない。それが私にできる恩返しと思ったんです」

段さんの「恩返し」とは―。

中国で新聞記者をしていた段さんが仕事を辞めて日本に来たのは、33年前。日本語は全く話せず、日本人の友達もいない中で、上野駅にあった居酒屋でアルバイトを始めた。

「オーナーはバイト代を払うだけでなく、日本語を教えてくれました。1年ほどたって新聞の一文を音読するように言われ、一語も間違えずに読み終えると彼は大喜び。店で人気のしょうが焼きをごちそうしてくれました」

あの時の感動、言葉や文化を学ぶ大切さを痛感したことが、日中の相互理解に貢献する段さんの「恩返し」につながっている。

20年の節目となった作文コンクールには、中国の大学や高校など182校から2686作の応募があった。累計では6万人を超す中国各地の若者が、それぞれの思いを寄せてきた。

18年には、日本人が中国に滞在した時に感じたことや中国の魅力などをつづる作文コンクール「忘れられない中国滞在エピソード」を始めた。今年は5月7～31日に作品を募集する（詳細は日本僑報社のホームページ）。

1年ほど前、東京で会った時よりも段さんの表情は明るいように感じた。日中関係に少し光が差してきたからだろうか。

中国に「以民促官（民をもって官を促す）」という言葉がある。日中が政治的対立を深めた時も、両国をつなぎ留めてきたのは間の力だった。段さんの恩返しは、これから続く。（論説委員）

友好訪問

始まりは武漢のアパートから 中国での温かな出会いと学び

第7回「忘れられない中国滞在エピソード」最優秀賞受賞

主婦　金丸 利枝（かなまる りえ）さん

【プロフィール】
1970年、福岡県生まれ。地元の大学を卒業後、会社員を経て、2012年に夫の転勤に伴い同県・朝倉市武蔵へ移住。その後、2016年に江蘇省蘇州、2022年に広東省広州へ転居。地元の人々との交流や大学での中国語習得を通じて中国語を習得。2024年、日本僑報社主催の第7回「忘れられない中国滞在エピソード」で中国大使賞を受賞。

AIを活用した語学学習の先へ 日本人との交流で気づいたこと

第20回「中国人の日本語作文コンクール」日本大使賞受賞

大連外国語大学4年生　林 芳菲（リン ファンフェイ）さん

【プロフィール】
2002年11月、中国山東省済寧市生まれ。大連外国語大学4年生。2024年4月から立命館大学経営学部に1年間留学。第23回「中国人の日本語作文コンクール」で最優秀賞（日本大使賞）を受賞。

笑いのボール。投げかけて 日中の未来を明るく照らす

中国語落語の先駆者、日中友好の語り部

落語家・中友会会長　林家 三平（はやし や さん ぺい）さん

【プロフィール】
1970年東京都生まれ。初代林家三平の次男で、現在は七代目林家正蔵。中国語落語の先駆者として、2005年から中国語で「時そば」「動物園」などを紹介。青島、上海、アモイ、浙江省天台寺でも公演を行い、2010年には上海「陽心大剧院」で舞台被覆公演を開催。著書に「父の背中」「林家三平奇跡物語」など。東京五輪パラ応援大使。2021年、「忘れられない中国滞在エピソード」中国大使特別賞を受賞。

▲2025年3月1日　▲2025年5月1日
◀2025年4月1日

日本と中国 Japan and China Friendship Newspaper

日経中文网

2025年11月10日

第21届全中国日语作文大赛在北京颁奖

2025/11/10

获得“日本大使奖”的朱恒宇（中）同学和日本驻华大使金杉宪治（右）、日本侨报出版社总编辑段跃中（左）

由日本侨报社与日本驻华大使馆共同主办的第21届“中国人日语作文大赛”颁奖典礼暨日语演讲大会，于2025年11月7日在日本驻华大使馆举行。日本驻华大使金杉宪治向获得最优秀奖・日本大使奖的大连外国语大学4年级学生朱恒宇同学颁发了奖状。

本届大赛一等奖获奖者为：复旦大学张靖苒、吉林大学高宇涵、北京大学周之冕、中国人民大学张力钒、天津外国语大学王雷鸣。

NHK クローズアップ現代

2025年12月22日

NHK WORLD JAPAN

2025年3月2日

住民の温かさ知った日々

中国滞在作文コン　金丸さん最優秀賞

中国での経験や思いを日本人がつづる作文コンクール「忘れられない中国滞在エピソード」（日本僑報社主催）の表彰式が、中国大使館（港区元麻布）で開かれた。最優秀賞「中国大使賞」は金丸利枝さん(54)＝中央区＝が受賞。夫の中国転勤を機に湖北省武漢市で暮らした経験を「中国で人生初のご近所付き合い」と題してまとめた。

金丸さんは、最初は中国語がまったく分からず、知り合いもいない中で、思い切って近所の住民たちが毎朝続けていた体操に参加。住民たちの温かさに触れ、交流を深める中で、中国語の学習に積極的に取り組んだ日々をつづった。

表彰式のスピーチで金丸さんは「出会いというものは素晴らしい。人生を豊かにしてくれる」と語った。式後は「日常をつづっただけなのに受賞は身に余る光栄。うれしさでいっぱいです」と笑顔を見せた。

3等賞を受賞したモワンヌ前田未希さん(39)は広東省広州市での出産体験を書いた。表彰式で中国舞踊を披露したモワンヌさんは式後、「多くの人から、日中関係をより良くしていこうという前向きな気持ちが感じられた」と喜んでいた。

コンクールは2007年、中国留学経験者を対象にした作文コンクール「忘れられない中国留学エピソード」が始まり、翌18年から、留学だけでなく中国に行った経験がある人に対象を大きくひげ「忘れられない中国滞在エピソード」として年1開催している。7回目となる今回は約2000人が応募した。

呉江浩駐日中国大使はコンクールについて「中日の民間交流、国民レベルでの理解の増進に大きな役割を果たしている」と高く評価した。このほか、舛添要一元都知事や元卓球選手の福原愛さんらが特別賞を受賞した。【鈴木玲子】

▲2025年1月3日

毎日新聞

◀2025年2月22日

日本と中国

中国人の日本語作文コンクール

交流の糸つむぎ20年

AI時代　人とのつながり、これからも

「中国人の日本語作文コンクール」で受賞した人や関係者

中国人学生たちが日本語で日中交流への思いをつづった「中国人の日本語作文コンクール」（主催・日本僑報社）の受賞者6人が来日した。18日には6人や関係者らによる「ご報告と感謝の集い」が衆院第2議員会館（千代田区）で開かれた。【鈴木玲子】

受賞者来日 喜びの声

最優秀賞（日本大使賞）に輝いた大連外国語大4年、林芳菲さん(22)は、言葉では言い尽くせないほど感謝しています。コンクールは単に日本語力を測るだけでなく、社会の変遷を記録する貴重な舞台となっています」と語ります。

コンクールは日中の相互理解と促進を目指して2005年に始まり、24年までに20回を迎えた。これまでに400以上の学校から6万人以上が応募した。

第20回のテーマは「AI時代の日中交流」。林さんは24年春から立命館大で留学生活を送る中で、当初はAI（人工知能）を日本語学習に生かしていたが、実際に日本人と交流し、相手を思いやる大切さを学び、AIの用順を減らしていった経験を書いた。

あいさつした林さんは、コンクールが20年間の歩みに触れ、時を超えた見えない糸がたちを結び付けていると強調した。

「中国人の日本語作文コンクール」で受賞した人や関係者

最優秀賞（日本大使賞）に輝いた大連外国語大4年、林芳菲さん(22)は、言葉では言い尽くせないほど感謝しています。コンクールは単に日本語力を測るだけでなく、社会の変遷を記録する貴重な舞台となっています」と語ります。

コンクールは日中の相互理解と促進を目指して2005年に始まり、24年までに20回を迎えた。これまでに400以上の学校から6万人以上が応募した。

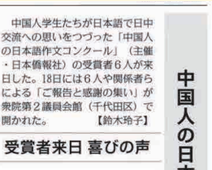
第20回のテーマは「AI時代の日中交流」。林さんは24年春から立命館大で留学生活を送る中で、当初はAI（人工知能）を日本語学習に生かしていたが、実際に日本人と交流し、相手を思いやる大切さを学び、AIの用順を減らしていった経験を書いた。

あいさつした林さんは、コンクールが20年間の歩みに触れ、時を超えた見えない糸がたちを結び付けていると強調した。

あいさつした林さんは、コンクールが20年間の歩みに触れ、時を超えた見えない糸がたちを結び付けていると強調した。

これまでに応募した中国人学生たちが日本語で日中交流への思いをつづった「中国人の日本語作文コンクール」（主催・日本僑報社）の受賞者6人が来日した。18日には6人や関係者らによる「ご報告と感謝の集い」が衆院第2議員会館（千代田区）で開かれた。【鈴木玲子】

最優秀賞（日本大使賞）に輝いた林芳菲さんが恩返しの日本語作文を書く喜びを語っていらいずれも千代田区で



あいさつする林芳菲さんが恩返しの日本語作文を書く喜びを語っていらいずれも千代田区で